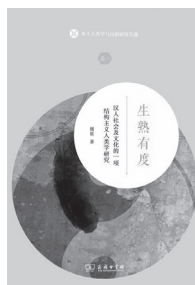


周星著

生熟有度

——漢人社会及文化的一项結構主義人類学研究

商務印書館／2019年10月／272頁／45元



薛 鳴

解題

本書は著者の「本土人類学と民俗学研究シリーズ」（全四冊）のうちの一冊である。著者は北京大学社会学人類学研究教授を務めた後、来日し、爾来、長い間日本の大学で教鞭を執ってきた。愛知大学国際コミュニケーション学部教授を経て、現在神奈川大学の教授である。名実ともに中国の本土に根差した人類学研究をけん引する存在であることは周知のとおりである。

さて、中国語で書かれた本書を日本語で紹介するにあたって、まず、書名をどう訳すかに直面する。「生熟有度」を直訳すると、「生」と「熟」に度合いあり」とでもなるが、その題名を見たとき、人間関係にまつわる「生」と「熟」にしばらく拘っていた筆者には、「親しき仲にも礼儀あり」という日本語が連想された。しかし、読み進めていくにつれ、人間関係以前に、人間の生存にかかわる「食」や一個人の成長過程、そして異民族との関係、それらすべてに「生」と

「熟」の対比によって語られる民族誌があったことを再認識するに至った。

「生」（生の）と「熟」（火を通した）という対比をなすこの二つの形容詞は、原義から派生した比喩的な意味で使われることが多い。本書は中国人の食文化（食の調理）や養生（中医学）、人としての（生理的、心理的）成長と人間関係、さらに異民族との付き合いなど、「生」と「熟」によってとらえられ、表現され、解釈される数々の事象にまつわる言説を、多くの文献や人々の日常から見出し、仔細に分析し考察を行った。

そこで、書名の翻訳は少し先送りにして、まず、内容を紹介するにあたり、本書の詳細な目次を日本語訳付きで以下に引用する。

導言（はじめに）

第一章 「生」と「熟」…民俗分類の普

適性（第一章 「生」と「熟」、その民俗的カテゴリーの普遍性）

第一節 対応する「自然／文化」的「生食／熟食」（第一節 「自然／

文化」に対する「生食」(生のもの)／「熟食」(火を通したもの)

第二節 発明「熟食」的文化英雄

(第二節 「熟食」を発明した英雄)

第三節 日常生活中的「生食」与「熟食」(第三節 日常生活における「生食」と「熟食」)

第四節 「生菜」与「熟菜」(第四節 「生菜」と「熟菜」)

第五節 「生土」／「熟土」、生地／熟地」(第五節 「生土」／「熟土」、生畑／熟畑」)

第六節 伝統工藝中的「生／熟」問題(第六節 伝統工藝における「生／熟」の問題)

第七節 書画藝術中的「生／熟」論(第七節 書と絵にまつわる「生／熟」論)

第二章 漢文化中人的「生熟」、夾生」与「成熟」(第二章 漢民族における人間の「未熟」、「半生」)

第一節 人邁向「成熟」的不同層次(第一節 人間の「成熟」への段階)

第二節 成長過程の儀式と成人の儀式(第二節 成長過程の儀式と成人の儀式)

第三節 旨在「預熟」的「跨火」儀式(第三節 「予熟」のための「火を跨ぐ」儀式)

第四節 旨在「催熟」的「鬧洞房」(第四節 「催熟」のための「初夜へのいたずら」)

第五節 涉及性的俗語、隱語及其他(第五節 性に関する俗語、隱語及びその他)

第六節 各地方言对人的「半熟」／「夾生」狀態的描述(第六節 各地方言における「半熟」／「半生」にまつわる表現)

第七節 「剩女」与「剩男」歧視的根源(第七節 未婚男女への差別、その根源)

討論 成為「全人」的幸福觀(「ディスカッション」[「全人」ゆえの「幸福観」])

第三章 「生人」、熟入」与人際關係實踐(第三章 「生人」(赤の他人)と「熟入」(よく知る人)及び人間關係の實踐)

第一節 「生人」与「熟入」(第一節 「生人」と「熟入」)

第二節 「生／熟」之間的人際關係實踐(第二節 「生」と「熟」の間における人間關係の實踐)

第三節 「差序格局」中的「熟入」与「生人」(第三節 「差序的な構造配置」における「生人」と「熟入」)

第四節 「半熟社会」的尷尬(第四節 「半熟社会」の気まずさ)

討論 「熟入社会病」与公共性的成長(「ディスカッション」[「知人社会」の病と公共性的成長])

第四章 漢文化对周边異民族的「生／熟」分類(第四章 漢民族による周辺民族についての「生／熟」分類)

第一節 「五方之民」的「天下」結構(第一節 「五方の民」にみる「天下」の構造)

第二節 「生蛮」、生獠」、生胡」以

及生／熟吐渾（第二節）生蚕、
生獠、生胡、及び生／熟吐渾）

第三節 生羌、与、熟羌（第三節）

生チャン（族）と熟チャン（族）

第四節 生／熟、女真及、生／熟、

韃靼（第四節）生／熟、女真、

及び、生／熟、韃靼）

第五節 生戸、与、熟戸（第五節）

生戸と、熟戸）

第六節 生苗、与、熟苗（第六節）

生ミョウ（族）と熟ミョウ（族）

第七節 生黎、与、熟黎（第七節）

生黎と、熟黎）

第八節 台湾的、生番、与、熟番、

（第八節）台湾における、生番、
と、熟番）

第九節 生夷、与、熟夷、及其他

（第九節）生夷、熟夷、その他）

討論 族群、生／熟、論的歴史局限性

（デイスカッション）民族グルー

プに関わる、生／熟、論の歴史的

限界）

結語（おわりに）

後記与鳴謝（後記と謝辞）

本書の方法論と内容

本書はサブタイトルに『漢人社会及文化的一項結構主義人類学研究』（漢民族社会と文化についての構造主義人類学的研究）とあるように、構造主義の分類法を用いて、その祖とも言えるフランスの人類学者クロード・レヴィ・ストロースの『神話論理 生のものと火を通したものの』から得た『生／熟』という対になっている概念を下敷きしながら、中国、主に漢民族の社会と文化について考察した、非常に興味深い一冊である。火の発明により人類が大きく進化と進歩を遂げたことを引き合いに出すまでもないが、著者は『生／熟』という「二項対立」の命題に普遍性を見出し、とりわけ、中国漢民族の文化にみられる多くの事象の解釈に有用であることを力説している。以下、目次に沿って内容を少し展開しながら筆者の感想も交えて紹介していく。

(一) 「食」から出発した

民俗学的『生』と『熟』

『生』と『熟』対「自然」と「文化」、著

者はその両者の間に偶然とも必然ともいえる対応関係を見出す。火の使用によ

る「熟食」の摂取から、人々は様々な手

の込んだ調理法を考案し、「食」を「文

化的」に昇華させてきた。一方、『生』

は浄化を経ていない『生水』にみるよう

に、衛生的ではないと見なされており、

中国に行つたことのある人なら、誰もが

注意するか、されるかの事柄の一つであ

ろう。また、『生／熟』と並んで『冷／

熱』もあるが、『冷』は『生冷』（冷たい

もの）の意味として使われることから分

かるように、飲食における禁忌の一つに

なっている。いまでこそ『氷鎮』（冷や

した）ビールも飲食店に出ているが、常

温のビールもなお健在で、レストランで

お冷の代わりにぬるま湯が出されるの

も、『生冷』は「体に毒」という考え方が

常識として人々の食習慣に根差してい

るからであろう。

『生食』と『熟食』の原理がそのまま

『中薬』（漢方薬）に応用されたとして、

『生薬』と『熟薬』について伝統医学の

文献を多く援用し論ずるなか、『生』、

「熟」間の「炮制」（加工）の加減により、その効用も異なるという中医学的見地から、民間で長く伝えられてきたゆえ約束事になっていることに、「生熟有定」という要を得た表現を与えている。

一方、「生土」と「熟土」に至っては考古学の発掘現場に関わった経験を持つ著者ゆえの論及であり、人の生活跡の有無によるこの分類も「生／熟」対「自然／文化」がよく現れる一例である。また、「畑」の「生地／熟地」という耕耘の有無による分類は、よく知られる英語の culture がラテン語の「耕す」、「住む」を意味する colere に語源を持つことに通ずるといふ指摘も興味深い。

そこで、「食」にまつわる「生／熟」から、さらに伝統工芸や書画芸術にまつわる「生／熟」へと論が及ぶ。骨董品の玉や古銭、鉄器などについても、「熟」は人の手によってよくなじませてあるのに対し、「生」はその逆の意味ばかりでなく、古銭の場合「贋物」という意味まで含まれる。また書画となると、書く（描く）人の熟練度という派生義で使わ

れるのは言うまでもない。技術について語るとき、中国語でよく「生／熟」という対語を使うものだと改めて領ける。ここで二、三例挙げると、「生手／熟手」（新米／ベテラン）から、諺に「一回生二回熟」（二回目は分らなくても二回目ともなると分かる）、「熟能生巧」（熟練こそものの巧みなれ／好きこそものの上手なれ——この「生」は動詞「生まれる」の意）などが連想される。一方、「書必先生而後熟、亦必先熟而後生」（書は必ずや生から熟へ、また熟から生へ）と、腕に流され過ぎず、初心をもつて臨むことこそが達人としての究極の境地という古人の教えも示されている。

(二) 人の成長にまつわる「生」と「熟」
人の成長プロセスにも「生／熟」にまつわる表現でその段階性が表れる。人が幼児から少年（少女）、青年へと成長していく過程は、「生澁」（未熟、「夾生／半熟」（半生／半熟）、そして成熟へと、心身ともに成長していく過程である）とらえられ、中国各地に伝わる様々な伝統儀式に、人間成長の節目に行われる儀式

や、その最たるものとなる結婚式の風習などの記述は、どれもが著者の長年のフィールドや文献の調査と考察による好例である。「熟」への準備の「予熱」と表現された「跨火」や、結婚式の初夜に隣人たちによる「催熱」（「熱」状態への催し）のための「開洞房」、それらの儀式はいずれも「熟」へのアプローチである。一方、そこには過去の縁談・成婚のしきたり（新郎新婦が結婚して初めて顔を合わせる）という文脈があつたことは言うまでもない。とはいえ、性にまつわる俗語や隠語をはじめ、その文脈にして現代に伝わるその言い回しありと云えるものが実に多く存在している。そこで連想されたものに、「生米做成熟飯」（コメがご飯に出来上がった）があるが、後戻りができない既成事実を言うときに使われ、多くは婚約前の女性が妊娠してしまうことを意味するメタファーになる。ちなみに、「自然の成り行き」を表す「瓜熟蒂落」（瓜は熟せば蔓から落ちる）もあることに考えが及ぶ。一方、昨今の新語である「剩男／剩女」に目を向ける

と、未婚男女が「剩」（残った）というネガティブな表現になっているのは、まさに、人の成長が「生／熟」でとらえられてきた背景あつてのことと考える。

(三) 人間関係における「生人」と「熟人」人間関係を語るうえで、馴染んでいることはいないことは「生」、馴染んでいないことは「熟」で表される。人間一人ひとり自己を中心とした同心円のような関係ネットワークを持つており、親疎の度合いによる序列を「差序」とし、人間関係の水の波紋のような構図を「格局」とした費孝通の「差序格局」（差序的な構造配置）がよく知られている。それを踏まえながら、著者は費孝通の示した自己を中心とする血縁関係の差序的構造同様に、自己を中心に地縁、学縁、業縁を契機として展開される「熟人」と赤の他人である「生人」の差序的構造も存在していることについて論ずる。費孝通の示した関係ネットワークとは時代が異なり、都市化が進んでいる現代社会において、周りには「生人」とも「熟人」ともつかない「半熟」の人に囲まれているとも指摘してい

る。SNSによるコミュニケーションツールの多様化によって、その「半熟」現象が益々顕著になっているのではないかとも考える。その「半熟」な人は、「生人」よりも気まずさを伴うこともあれば、「熟人」になる可能性も秘めている。そして、その「熟人」こそ、「親」の関係になることも、「生人」を「熟人」に引き込んでくることもできる、重要な位置づけにあり、また、疎遠になれば「生人」になることもある。「生人／熟人」というカテゴリーは、自己を中心とする血縁関係の差序的構造の外側に伸縮自在な空間を作っているという指摘も興味深い。その「層」は重要な社会的資源となり、制度的・物質的資源の分配の不均衡で、「熟人」、または「熟人」の「熟人」の関係資源が社会で幅を利かせていることを「知人社会」の病（「熟人社会病」という指摘には頷ける。

(四) 民族間関係における「生」と「熟」自己からみた、血縁関係によらない他者に「生／熟」があるように、自民族からみた異民族に対しても「生／熟」でとら

えていたことについて、著者は大量の資料を辿りながら、最終章にして最も頁を割いて考察している。「中土（夏を含めた殷商王朝）に対して周り（辺境）にいる異民族を「四方」とした記述を甲骨文に遡り、異民族を表す「夷」「戎」「狄」「蛮」に方位を冠した「東夷」「西戎」「北狄」「南蛮」に「中国」を加え、「五方之民」という表し方を春秋戦国時代の記述に見る。異民族は、中国の長い歴史のなかで、漢民族による「熟化」の有無やその程度によって「生々」「熟々」に分類されていた。その分類は、言わば、異民族を秩序化する努力によるもので、「差序格局」の拡大版と見ることができると指摘し、漢文化を「正統」とした「中華」文明による統一「天下」にあつて、「生／熟」論は「華夷」（中心／周辺）論を具現化した最も通俗的で且つ根深い言説であり続けた。辛亥革命を経て、中国は多民族国家として独立したのをきっかけに、少数民族に対する「生／熟」のとらえ方も、民族間の協調・平等・団結の政策と理念とつてかわられた。今では

費孝通の「中華民族多元一体構造論」によつて方向づけられた民族的認識理論が、学術的に重要な意味を持つに至つたとしている。

書名の再考

著者が結びに、本書執筆の過程は自らがその生活に身を置き、ありふれた日常の様々な事象を絶えず「熟化」していく過程であると書いている。経験者ゆえの確かな内省をもつ一方、なかにいるゆえに見えないものもありかねない。しかし、著者が外からの視点も持ち合わせていることは、その研究生活の経歴と本書で援用された内外の数多くの文献によつて裏付けられる。本書を構成する全四章では、第一章と第二章の「生」と「熟」は、原義から「未熟」と「成熟」という比喩的な意味によつて、食から人の成長にまつわるいろいろな事象を語る言説を考察している。第三章と第四章の「生」と「熟」は、いずれもその原義から派生した比喩的な意味から、人と人、民族と民族の「関係」にまつわる事象を扱うも

のである。それぞれのテーマが著者の長年の研究の蓄積であることが本書の「後記」からうかがえる。各章の最後の「討論」(ディスカッション)は「まとめ」に留まらず、現代の社会事情に合った視点を加えてとらえなおすことも忘れない。

構造主義の二項対立の分類法は、言語学にも人類学にも有効性を持つが、一方、「二項対立」に「二者択一」を求めたものではないということも、本書を読んだ考えさせられるものである。前にも触れた「剩男／剩女」のような語の出現は、「生／熟」で人の成長(成熟)をとらえてきた背景に由来していることは自明である。一方で、性的マイノリティに対しても、人間の個性や価値観と社会生活の多様化の尊重に伴い、改めて関心が寄せられる昨今にも思い及ぶ。そして、第四章の異民族への「生／熟」観の歴史を通観したうえで紹介された、漢化した「熟」よりも、自民族独自の文化が色濃く残っている「生」をよしとする見方に興味を深く覚え、危機に瀕する少数民族言語にも思い及ぶ。現代社会のいろいろ

な現象を考えるうえで、本書はその文化的背景という深層構造の解明に多くのヒントを与えている。

本書は、「生」と「熟」にまつわる多くの語彙や言説によつて、中国社会の様々な事象を広く取り上げる文化人類学・民俗学の論著であるが、言語学を専門とする筆者にとつてもたいへん示唆に富んだ一冊である。その意味で人文社会にかかわる学際的な研究と言つても過言ではない。読者にとつてそれぞれの関心や視点から興味深く読める一冊になるに違いない。

さて、再び書名の「生熟有度」に立ち返つてみると、本書は「生」から「熟」へと変化するプロセスとアプローチの記述と分析を中心に据えた、いわば、「生」と「熟」の「間」を論考しているのだと読み進めていくうちに思えてくる。そしてそれは、本書の最後で「生」と「熟」の間「こそが本書の真意である」と著者が結んでいるのに一致している。